



The Japanese Association
of Organic Geochemists

Newsletter

Organic Geochemistry 59

Aug 13, 2014

目次

Announcement	2
第 32 回有機地球化学シンポジウム (2014 年湯河原シンポジウム) ファーストサーキュラー 力石 嘉人・高野 淑識・金子 雅紀	
People	5
Prebiotic Organic Geochemistry 古川 善博	
Message	7
日本有機地球化学会の歴史について 秋山 雅彦	
Information	13
年会費納入のお願い 三田 肇 ROG Vol.30(2014 年号 ; 30 周年記念号) への論文投稿を募集中 !! 沢田 健	
編集後記	14

Announcement

第32回有機地球化学シンポジウム(2014年湯河原シンポジウム)

ファーストサーキュラー



大暑の候、皆様にはいっそうご活躍のこととお慶び申し上げます。

さて、第32回有機地球化学シンポジウムは、JAMSTEC（力石・高野・金子）が世話人となり、11月5日（水）～11月8日（土）の日程で、湯河原温泉のホテル「ニューウェルシティ湯河原」にて、ホテルを借りての合宿形式で開催いたします。豊かな自然に囲まれた環境で、皆様の日頃の先端的研究や、個性・創造性のある分野横断的な研究の発表、また、建設的な議論の場として、多くの皆様のご参加を心よりお待ちしております。

1. 日程

11/5（水）：運営委員会（委員のみ）

11/6（木）・11/8（土）：講演会

2. 会場

ホテル「ニューウェルシティ湯河原」

〒413-0001

静岡県熱海市泉 107

TEL：0465-63-3721(代)

URL：<http://www.welcity-yugawara.co.jp>

JR 湯河原駅・ホテル間のシャトルバス（無料）があります。

3. 開催までのスケジュール

9/5（金）参加・講演申込の締切

10/3（金）講演要旨の締切

4. プログラム（仮：次ページ参照）

プログラムは、4区分（赤・青・紫・緑）で構成されます。

赤：11/5（水）運営委員会（委員のみ）

青：11/6（木）午前 関連企業の招待講演

紫：11/6（木）午後～11/7（金）夕 講演会

緑：11/7（金）夕～11/8（土）自由時間

現時点では仮のプログラムです。正式なプログラムはセカンドサーキュラーにてご案内いたします。

5. 参加費

シンポジウム受付でお支払い願います。以下の金額は予定であり、正式な金額はセカンドサーキュラーにてご案内いたします。

11/5 (水)		11/6 (木)		11/7 (金)		11/8 (土)	
14:00-15:00	受付	7:00-	朝食	7:00-9:00	朝食	7:00-9:00	朝食
15:30-17:30	運営委員会	8:30-	受付	9:10-9:20	諸連絡	9:00-	解散
17:30-19:30	自由時間	9:30-9:40	挨拶・諸連絡	9:20-10:40	発表 (セッション3)		
19:30-	夕食	9:40-12:20	企業プレゼン (招待講演)	10:40-11:00	休憩		
		12:20-	昼食	11:00-12:20	発表 (セッション4)		
		12:40-13:40	受付	12:20-13:20	昼食		
		13:40-14:00	挨拶・諸連絡	13:20-14:40	発表 (セッション5)		
		14:00-15:20	発表 (セッション1)	14:40-15:00	休憩		
		15:20-15:40	休憩	15:00-16:20	発表 (セッション6)		
		15:40-17:00	発表 (セッション2)	16:20-16:40	諸連絡		
		17:00-18:00	ポスター	16:40-19:00	自由時間		
		18:00-19:00	総会	19:00-	夕食		
		19:00-19:30	自由時間				
		19:30-	懇親会				
		21:30-	2次会				

上記プログラムで色分けされた区分で参加費が異なります。

例えば、全日程の参加の場合、一般会員：¥55,000 (15,000+25,000+15,000)、学生会員：¥36,000 (12,000+12,000+12,000) となります。

参加費には、朝食、昼食、夕食 (懇親会)、宿泊代が含まれます。

なお、非会員については、一般：各 2000 円・学生：各 1000 円増しになります。

参加費(会員)	一般	学生
赤	¥15,000	¥12,000
青	¥25,000	¥12,000
紫		
緑	¥15,000	¥12,000
日帰り参加	¥10,000	

6. 宿泊

宿泊は原則として、ニューウェルシティ湯河原にてお願いします (宿泊代金は、参加費に含まれています)。最寄りの旅館等への宿泊を希望される場合はご相談下さい。

なお、ニューウェルシティ湯河原では、基本的に 4 人部屋が主体で、1 人用の部屋は数部屋のみになります。相部屋での宿泊をご理解下さい。

7. 発表形態

口頭とポスターで行います。

- 1) 口頭発表は 1 件あたり質疑応答、PC 交換時間も含めて 20 分を予定しています。口頭発

表ではプロジェクターを使用します。できるだけ各自の PC での発表をお願いします。会場の PC の利用を希望する方は、事前にご相談下さい。

- 2) ポスター発表は、A0 サイズ (縦 120cm×横 83cm) を推奨いたします。2014 年度も学生参加者には「最優秀ポスター賞」を設けて、賞状・副賞等を進呈する予定です。

なお、時間と会場スペースの関係上、発表形態の変更をお願いさせていただくこともありますので、お含みおき下さい。



(この会場の半分を利用する予定です。)

8. 講演要旨

口頭発表、ポスター発表ともに 1 件につき A4 版 1 ページで作成して下さい。10/3 (金) までに、PDF 形式の電子ファイルを電子メール添付で ogeochem2014@jamstec.go.jp へご送付ください。メールタイトルに【湯河原シンポ要旨】と明記ください。

様式は、下記を目安として下さい。余白：上下 30mm、左右 20mm、行数 36 行、文字の大きさ：11 ポイント、1-2 行目はタイトルと発表

者氏名（センタリング、登壇者の氏名の前に○、
連名は・で区切り、所属は名前の後にカッコ書）、
3-4 行目は英文タイトル・氏名・所属を記入。

9. 参加・講演の申込み（登録）

上記の申込日（9/5、金）までに登録をお願いします。
以下の項目を電子メールにて宛先
ogeochem2014@jamstec.go.jp までお送り下さい。
メールタイトルに【湯河原シンポ申込】と
明記ください。

第 32 回有機地球化学シンポジウム（湯河原シン
ポジウム）参加申込（9 月 5 日必着）

1) 参加日程（参加に○）

- （ ） 赤：11/5（水）、運営委員会（委員のみ）
- （ ） 青：11/6（木）午前、関連企業による招待講演
- （ ） 紫：11/6（木）午後～11/7（金）夕、講演会
- （ ） 緑：11/7（金）夕～11/8（土）自由討論

2) 発表を、（ ）行います（ ）行いません（い
ずれかに○）

3) 氏名：

4) 所属（学生の場合は、指導教員名もご記入下
さい）：

5) 所属先住所：

6) 所属先電話：

7) e-メール：

8) 発表題目：

9) 発表者氏名（所属）：（連名の場合は、登壇者
の前に○をつけて下さい）

10) 発表形態：（ ）口頭（ ）ポスター（ ）
どちらでも可（いずれかに○）

11) 発表に関する希望：（日時、順番など）

12) 宿泊についての希望：（同室希望者の氏名、
シングル希望など）

10. その他

シンポジウム中の企画・会合や企業展示等を
希望の方は、世話人までご連絡下さい。

湯河原シンポジウム世話人：

ogeochem2014@jamstec.go.jp

- ・ 力石嘉人（046-867-9778）
- ・ 高野淑識
- ・ 金子雅紀



写真： <http://www.yugawara.or.jp>、
および、ニューウェルシティ湯河原 HP より

People

今回は、本学会会員から古川善博さん（東北大学）に寄稿していただきました。

Prebiotic Organic Geochemistry

東北大学 理学研究科地学専攻 助教
古川 善博

昨年度から会員になりました東北大学の古川善博です。有機地球化学会には入会するだいぶ前から親しくさせて頂いている研究者の方々が多く、興味があったのですが、生命の起源のような学際的な研究をしている私は入会している学会が多く、それまでに国内外併せて会費の発生する学会に 7 つも入っていたので、二の足を踏んでいました。2012 年に東北大で開催された仙台シンポジウムで初めて参加させて頂いて、その重要性を再認識し入会させていただくことになりました。

この記事では私のこれまでの研究やその経緯をご紹介します。これまで私は生命誕生前の地球惑星システムにおいて、生命を構成する有機物がどのように生成し、生命にとってより重要な材料になったのかという謎について模擬実験を通して研究してきました。タイトルにあるように Prebiotic Organic Geochemistry と勝手に呼んでいます。

私がこのような研究を始めたきっかけは当時学部 3 年生で研究室選びをしていた時に聞いた退官直前の中沢弘基先生的話でした。中沢先生の壮大なスケールの話聞いて、俄然この分野の研究に興味が増したのですが、中沢先生は退官直前でしたので、大学院に進学希望の学生の面倒は見られないとのことでした。私は当時、大学院に進学することを決めてはいなかったので、とりあえず面白そうな研究がやりたいと考えて中沢研に入れてもらいました。当時の東北大学の地学専攻では有機地球化学をやっている先生はほとんどおらず、今となっては初歩的な有機分析や実験操作も想像の範囲をはるかに超え

るもので、試行錯誤の繰り返しの日々が続きました。私は単純作業には飽きっぽいのですが、試行錯誤は性に合っているようで何とか実験を成功させようとアイデアを振り絞っていました。この研究を始める前には大学院進学さえ決めていなかったのに、この頃は研究の日々に充実感を感じるようになって、気がついたら博士課程に進学していました。修士課程以降は掛川武先生の研究室に引き取られて研究を続けることが出来ました。隕石の衝突によって引き起こされる化学反応に関する研究を無機、有機の両方の側面から行い、隕石衝突によるアミノ酸やカルボン酸、アミンの生成や、オリビンの水質変質の研究をしていました。

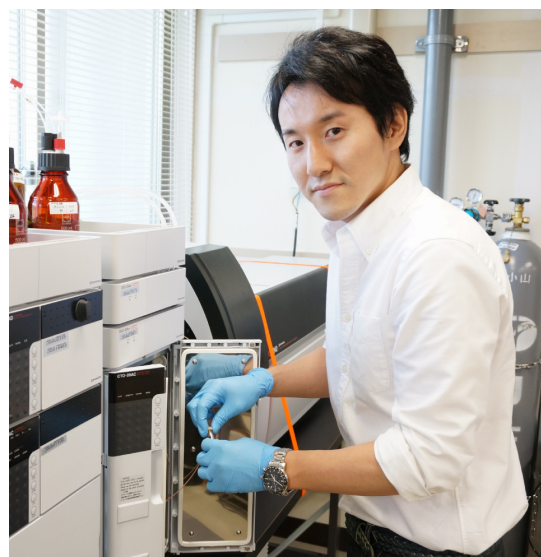
学位を取得した後は幸いにも東北大学の地学専攻で GCOE 助教として研究を続ける機会に恵まれました。この頃は、化学進化の中でアミノ酸生成の次の段階であるペプチドの生成に関する研究を行いました。海洋堆積物内の続生作用に伴うアミノ酸の重合実験を行い、圧力がアミノ酸やペプチドを安定化させることが見えてきました。

数年前からは、タンパク質と同様またはそれ以上に生命の起源に重要と考えられている RNA の起源に関する研究を始めました。RNA の構成物質の中で最も不安定なリボースの生成およびその安定化に対するホウ酸やケイ酸などの影響を研究し、ホウ酸がリボースを特異的に安定化させることを明らかにしました。今年の初旬はフロリダ州のゲインズビルにある Foundation for Applied Molecular Evolution (FfAME) に滞在して有機化学者、合成生物学者

である Steven Benner 博士と共に研究を行う機会に恵まれました。その間は RNA 生成においてリボース生成の次の段階であるヌクレオチドの生成やその重合に関する研究を行いました。このようにして私は地球惑星システムの様々な現象に着目し、生命を構成する有機物の誕生とその化学進化過程を明らかにすることを目標として研究を行ってきました。

我々自身が生命であることから、生命の起源解明は多くの科学的解明を積み重ねた人類に残された基礎的自然科学の最大の課題の一つであると考えています。生命の起源にはまだまだ多くの謎が存在し、その解明の為に分子生物学、有機化学、微生物学、合成生物学など様々な分野をベースにした研究が行われています。惑星探査においてもターゲットは生命起源となり得

る有機物に移りつつあります。私は有機・無機の地球化学的な視点をベースにこの謎に挑み続けたいと考えています。



愛用の UHPLC/MSMS で分析中

Message

本学会の名誉会員である秋山雅彦先生から、日本有機地球化学会の初期の歴史について、ご自身の体験を交えた貴重なメッセージをいただきました。

日本有機地球化学会の歴史について

秋山雅彦（本学会名誉会員）

1. はじめに

2002年9月、当時の石渡良志会長の名前で、新設されたアドバイザーの委嘱状が届けられた。また、2007年の総会（田上英一郎会長）では新設された名誉会員に推薦された。しかし、年会への出席もできず、本学会のための貢献は全くなされず、心苦しい昨今である。本会のホームページを検索したところ、美しい画面に学会の歴史が「学会アーカイブ」として記録されていた。しかし、その資料は2000年以降に限定されていて、1972年に有機地球化学談話会として発足した本学会の初期の歴史については欠落していることが分かった。そこで、創設からの歴史を記録する必要を感じ、その当時を知る者として、学会への貢献ができるのではと考え、筆を執ることにした。学会の創設当時の大先輩の田口一雄先生、畏友の半田暢彦氏は既に故人になってしまったことから、これまでのNews Letterなどの記述を頼りに筆を執った次第である。

2. 有機地球化学談話会の創設まで

名古屋大学水圏科学研究所の半田暢彦氏は東京教育大学理学部植物学科に、私は同大地質学鉱物学科に1952年の同期入学であったから、彼の存在は意識してはいたものの、お互いに敬遠していて、言葉を交わす機会は全くなかった。と言うよりも避けていたというのが真相である。彼との交友が始まったのは、1970年の秋であったから、大学に入学してから20年近くが経過していたことになる。半田氏との偶然の出会いがこの会の発足の契機の一つとなったことは知られていない。

1970年9月に東京で開催された Interna-

tional Symposium on Hydrogeochemistry and Biogeochemistry の会議で彼と会い、そこで我が国の有機地球化学研究の発展について意見を交わす機会をもった。彼は生物化学の立場、私は地質学という互いに異なった分野からの協力関係が必要であることで意見が一致し、有機地球化学談話会の設置をはかることになり、田口一雄先生にも相談をかけた。2年後の1972年10月宮城教育大学で開催された日本地球化学会の夜間小集会で田口一雄先生を中心に有志の会合が開かれ、有機地球化学談話会を設立することになった。その席で、日本地質学会と日本地球化学会の両学会での年会において夜間小集会を開催することで、この談話会の発展を期することが決められた。

1973年4月に日本地質学会第80年総会ならびに年会で、第2回の有機地球化学談話会が学会の夜間小集会の一つとして開催された。当時、日本地質学会では年会開催時に「地質学セミナー」として地質科学の重要な課題について会員向けのセミナーが開催されていた。第4回地質学セミナーとして有機地球化学の話題が取り上げられた。講演は「炭化水素の有機地球化学（田口一雄）」と「化学化石の諸問題（秋山雅彦）」との2件で、学会における有機地球化学のステイタス確立に一定の役割を果たした。

有機地球化学談話会の立ち上げとともに、私は田口一雄先生に数々の教えを受けることになった。北大では1972年に理学部地質学鉱物学科第五講座（燃料地質学）の助教授になるとともに、燃料地質学の勉強を始めなければならなかった。それまでは古生物学そして古生化学

の分野を専門としてきたために、石油地質学の分野は全くの素人であった。そこで、非常勤講師として田口先生をお招きし学部学生対象の講義をしていただいた。その講義は私にとってまたとない石油地質学の勉強の場となったことは間違いない。石油技術協会の会員になったのもその時期であった。各種の学会に参加の折には、田口先生と同じ宿に泊まり、薫陶を受ける機会に恵まれた。先生には弟子として、また有機地球化学の仲間として接していただいた。

田口一雄先生は、1949年に東北大学理学部岩石鉱物鉱床学科を卒業、同年6月には東北大学理学部助手として採用されている。その年の4月1日には高橋純一教授は東北大学を定年退官され、東北大学名誉教授となっておられた。

高橋純一先生は1922年に海成腐泥岩中の不溶性有機物の加熱によって石油が生成することを示し、有機地球化学研究の草分け的な存在の研究者であった。田口先生は学部学生時代の4年間に高橋先生から強く影響を受けられたに違いない。地質学の分野においては、有機地球化学は高橋 - 田口のラインに連なり、石油業界や大学での多くの教え子によって開花したと言えよう。なお、高橋先生は退職後、1950年6月から1954年9月までの4年余りの期間、信州大学学長職を務められたことはあまり知られていない。

3. 海外における石油有機地球化学の発展

1959年に第5回国際石油会議がニューヨーク市で開催され、"General Petroleum Geochemistry Symposium"がBart NagyとEd Baker、Paul Witherspoonが世話人となって実施された。1960年11月には米国地質学会開催時にGeochemical SocietyにOrganic Geochemistry Division (O. G. D.)が設立され、その分科会として開催された会議"Origin of Petroleum (co-chaired by Harold Smith and Fred Rossini)"への参加者は200人に達した。

1962年にはInternational Meeting on Organic Geochemistryの第1回の会議がイタリアのミラノで開催され、参加者120名であ

ったという。この会議は2~3年置きに開催され、1973年の第6回のバリ会議から、IAGC (International Association of Geochemistry and Cosmochemistry)が協力組織として参加し、1975年の第7回マドリッド会議では、新しく成立したヨーロッパ有機地球化学会 (European Association of Organic Geochemistry)とIAGCとの共同会議となった。

米国でのGordon Research Conferenceでは石油関連の会議は"Origin of Petroleum" (co-chaired by Harold Smith and Fred Rossini)をテーマに1963年に開催されたのが最初であった。Organic Geochemistryの部門がGordon Research Conferenceに設置されたのは1968年で、その後は隔年の開催となった。私が参加したのはNew HampshireのHolderness Schoolで開催された1998年の会議であった。

石油のケロジェン成因論はTissot B.P. et al. (1971)によってパリ盆地のジュラ紀Toarcian Shalesの研究で確立され、有機地球化学の重要性が脚光を浴びるようになった。そして、1977年には雑誌"Organic Geochemistry"がIrving A. Bregerによる編集でPergamon Pressから創刊された。私が米国地質調査所(USGS)にBregerを訪ねたのは1979年の初夏であったから、彼がOrganic Geochemistryの編集を務めていた時期であった。当時、私はメリーランド大学のCyril Ponnamperna教授のもとで、先カンブリア時代のチャート中に含まれるアミノ酸の安定性に関する研究を行っていた。メリーランドのCollege ParkからUSGSまでは1時間程度の距離であった。その訪問の際に有益だったのは有機地球化学に関する討論とともに、Bregerから提供されたGreen River Shaleの粉末サンプル (Geostandard 015 SGR-1 Split No.654)で、それはタイプIケロジェンのスタンダードとして、各種の研究に有効に利用することができた。そのサンプル瓶を取り出す度に、あの太りすぎていた彼の姿を思い出したも

のだった。

残念なことに、Breger は 1983 年に亡くなり、雑誌 Organic Geochemistry の編集はマイアミ大学の Earl W. Baker が引き継ぐことになり、Vol.5 (1983) から European Association of Organic Geochemists (EAOG) の出版物とも位置づけられ、Vol.12 (1988) からは正式に EAOG の Official Journal となった。

有機地球化学は石油成因論への貢献に始まり、その後は環境化学や古環境・古気候へと幅広い分野への発展の道を歩んでいる。ここでは、私が関連を持った石油有機地球化学に限定して簡単に述べてきた。

EAOG が主催する Organic Geochemistry の国際会議は隔年ごとに開催されることになり、現在に引き継がれている。田口先生は 1975 年の第 7 回マドリッド会議以降、皆出席だったと伺っている。この国際会議への私の参加は 1989 年に開催された第 14 回のパリ会議からである。



田口一雄先生と John. M. Hunt 博士
有機地球化学国際会議（1991 年 9 月
Manchester）にて撮影

4. 国内での有機地球化学

1) 有機地球化学談話会の発足

上記のような国際的な活動状況に対応して、国内でも有機地球化学研究の組織作りが必要であるとの認識もあって、1972 年に仙台の宮城教育大学で開催された日本地球化学会の討論会の際に集会をもち、有機地球化学談話会が発足したことは、すでに述べた通りである。

田口先生は 1971 年に International Association of Geochemistry and Cosmochemistry の有機地球化学分科会の委員に就任されたこともあって、国際的な広い視野を持っておられ、国外における有機地球化学の発展に対して国内での不振を危惧されていた。先生は 1974 年に「油田新第三系に含まれるポルフィリン類の堆積学的研究」で石油技術協会賞を受賞された。1975 年には文部省総合研究 (B)「有機物の続成作用的变化の研究」の研究代表者を務められた。この総合研究が契機となって、我が国での有機地球化学研究が活発化したことは間違いないところである。この総合研究の参加者は 28 名で、下記のような研究機関のメンバーから構成された。北海道大学 (2)、東北大学 (3)、東京都立大学 (2)、東京農工大学 (2)、東京経済大学 (1)、東京教育大学 (1)、地質調査所 (5)、農業技術研究所 (1)、新潟大学 (1)、名古屋大学 (4)、大阪市立大学 (1)、愛媛大学 (1)、九州大学 (4) (カッコ内の数字は参加者人数)。

2) 機関誌 ROG の刊行

この総合研究の報告書は 1976 年 3 月に発刊され、22 編の論文が収められている。同時に、有機地球化学談話会の機関誌“Researches in Organic Geochemistry (ROG)”の創刊号として位置づけられ、巻末には会員名簿が掲載されている。会員総数は 67 名であった。

1975 年 6 月に東京大学海洋研究所で研究所の共同利用の一環行事として「続成作用における有機物の変化に関するシンポジウム(世話人秋山雅彦)」が開催された。その成果は地球化学 10 巻 1 号 (1976) に同じ課題で特集号として収録されている。

1976 年に高知大学で開催された日本地質学会第 84 年年会で、討論会「ダイアジェネシス」(田口一雄ほか、1978)が開催され、その成果は地質学論集 15 号として 1978 年に刊行されている。同じ年の 1976 年 10 月には名古屋大学で開催された日本地球化学会の夜間小集会として開催された第 7 回有機地球化学談話会で、本会の事務局が東京都立大学理学部の石

渡良志研究室に置かれることになり、News Letter の創刊号が 1977 年 3 月 20 日付けで刊行された。

1977 年 7 月には川渡シンポジウム（東北大学川渡共同セミナーセンター）が開催され、その成果は ROG No.2（1978 年 9 月刊行）に収録されている。1979 年 12 月には東京大学海洋研究所で共同利用のシンポジウムとして「堆積物における有機物の続成的変質機構（世話人 半田暢彦）が開催された。1981 年には大滝シンポジウム（北海道大学大滝共同セミナーハウス）が開催され、このシンポジウムは隔年ごとの本会の公式行事として定着していった。そして、1994 年からは毎年の開催となり、それらの成果は ROG に掲載されている。

その後の有機地球化学シンポジウムについては、News Letter No.32 に掲載されているので、学会 HP のアーカイブス欄を参照してほしい。

1980 年からは 3 年間の総研(A)「堆積岩の続成作用に関する研究（研究代表 田口一雄、分担者 22 名）」が発足した。研究のための共通資試料として山形県新庄盆地の大芦沢ルートと小国川ルートが選ばれ、その成果は「堆積岩の続成作用」と題して堆積学研究会報特別号（田口ほか、1982）として刊行された。その

エッセンスは研究代表者の田口一雄と研究分担者の共著として SEPM Special Publication No.8 “Role of Organic Matter in Sediment Diagenesis” に掲載され、有機地球化学談話会の研究成果が国際舞台に登場することになった（Taguchi et al., 1986）。

3) 有機地球化学研究会から日本有機地球化学会へ

このような活動の成果を背景に、1985 年 10 月 17 日開催の談話会総会で、それまでの有機地球化学談話会是有機地球化学研究会（The Japanese Association of Organic Geochemists）という名称の学会に昇格することになった。学会となるための活動基盤が創られてきたこととともに、石油関連会社に賛助会員として登録してもらうためにも必要な措置であった。研究会の発足に当たっては新しい会則が設定され、会長、運営委員、監事などの役員がおかれ、学会としての体裁が整った。初代会長には田口一雄会員が選出された。この時期以降を創設期に次ぐ発展の第 2 期と位置づけることが出来よう。

隔年ごとに実施されていた研究会のシンポジウムが 1994 年から毎年の開催となった。それにもなつて、Researches in Organic Geochemistry (ROG) も Vol.10 から年 1 冊の



1983 年中津川シンポジウムの集合写真（提供：氏家良博氏）



有機地球化学研究会会則が承認（筑波大学で開催された日本地球化学会の夜間小集会、1985年10月17日）

刊行となり、1996年刊行のVol.11からは鈴木徳行会員の制作による美しいロゴマークがROGの表紙を飾っている。当時、研究会の会長を務めていた私はそのVol.11に田口先生の追悼記事（秋山、1996）を書くことになる。田口先生が逝去された1996年は、研究会が発展の第3期を迎えた時期であった。研究会の大黒柱をこのように早く失ってしまったことは誠に残念でならない。なお、会誌ROGの国際登録は1999年6月発行のVol.14からで、ISSN1344-9915となっている。

1997年には研究奨励賞（田口賞）が新設され、2名の若手会員が受賞した。有機地球化学賞（学術賞）は1999年の創設で、その年に第1回の授賞式が行われた。情報化時代を迎え、研究会のHP < <http://www.aist.go.jp/GSJ/dFR/rog.html> > が地質調査所の事務局内で開設され、その記事は1996年10月4日発行のNews Letter 23に掲載されている。2001年から事務局が北海道大学へ移転、News LetterがHPからダウンロードできるようになった。更には、研究会のMLが設定され、情報の伝達が便利になってきている。2005年のVol.20からはROGの表紙が美しいカラー刷りとなり、今日に至っている。

2001年の総会で将来構想を検討するための「将来計画委員会（委員は河村公隆、鈴木徳行、田上英一郎）」の設置が決まり、研究会の在り方、ROGの見直し、シンポジウムの在り方、

その他研究会の将来にかかわる課題が検討されることになった。そして、翌年の2002年8月の総会で、研究会の名称が日本有機地球化学会（The Japanese Association of Organic Geochemists）に変更され、会則の改定（2002年8月2日）が承認された。

学会のHPには「学会アーカイブス」の欄が設けられ、News LetterはNo.31（2000.5.15刊）以降が公開されている。また、「年会のお知らせ」の欄には、第19回有機地球化学シンポジウム（2001.7.17～19）以降のシンポジウムを見ることができる。したがって、この論説ではそれ以前の学会活動の紹介だけに留めておくことにした。

<会費の変遷>

学会の年会費は500円（1977年3月発行のNews Letter No.1に記述あり）で始まり、1984年から年額1,000円、そして1997年に年額2,000円（学生会員1,000円）となる。

<会員数の推移>

1973年8月 51名； 1977年10月 69名；
1982年10月 85名； 1986年10月 106名、賛助会員5社；
1992年1月 102名、賛助会員3社；
1994年8月 106名、賛助会員3社；
1999年10月 130名（会員の内訳は大学関係者68名、石油会社および石油公団31、官公庁20、その他）、賛助会員3社；
2001年6月30日 122名、賛助会員2社；

2005 年 6 月 10 日 146 名(一般会員 118 名、学生会員 28 名)、賛助会員 5 社； 2013 年度終了時点 176 名(一般会員 124 名、学生会員 46 名、名誉会員 6 名) 賛助会員 7 社。

<会則について>

1985 年 10 月 17 日の総会で承認。有機地球化学研究会 (The Japanese Association of Organic Geochemists) となる。会長、運営委員、監事がおかれ、学会としての体裁が整う。2002 年 8 月 2 日の改定で有機地球化学研究会は日本有機地球化学会 (The Japanese Association of Organic Geochemists) に名称変更がなされ、新しい会則が承認された。2007 年 7 月 26 日の改定版は学会 HP の「学会概要」の欄に掲載されている。

5. おわりに

私は有機地球化学会の発展史について、4 回にわたる連載記事を News Letter に掲載した(秋山 1999a、1999b、2000、2001)。

秋山 (2000) と秋山 (2001) については学会 HP の「学会アーカイブス」の欄に全文が収録されているが、秋山 (1999a) については未収録、秋山 (1999b) についてはその一部が欠落している。

本論説では、上記の News Letter での 4 回にわたる連載を再検討するとともに、新たに不足部分を補って本学会発展の全貌が理解できるように試みたが、必ずしも十分とは言えない。会員諸氏からのご指摘を得て、加筆・修正をしていきたいと考えている。ご協力をお願いしたい。(2014 年 7 月 30 日)

文献

秋山雅彦 (1996) 田口一雄先生ご逝去を悼む。

ROG, Vol.11, ii~iii.

秋山雅彦 (1999a) 有機地球化学研究会の歴史

(1) 「有機地球化学談話会」創設の頃. News Letter 30, 12-13.

秋山雅彦 (1999b) 有機地球化学研究会の歴史

(2) News Letter からよむ発展史. News Letter 31, 4-7.

秋山雅彦 (2000) 有機地球化学研究会の歴史

(3) シンポジウム開催と ROG. News Letter 32, 9-12.

秋山雅彦 (2001) 有機地球化学研究会の歴史

(4) 更なる発展を願って. News Letter 34, 9-11.

田口一雄・相原安津夫・秋山雅彦・石渡良志・

市原優子・井本伸広・歌田 実・斉藤靖二・佐々木清隆・島田昱郎・下田 右・下山 晃

(1983) 山形県新庄盆地大芦沢、大俣・白玉川、小国川ルートの地質。堆積岩の続成作用に関する研究。堆積学研究会報 特別号, 17~19 号。

Taguchi, K., Shimoda, S., Itihara, Y., Shimoyama, A., Akiyama, M. and Suzuki, N. (1986) Relationship of organic and inorganic diagenesis of Neogene Tertiary rocks, Northeastern Japan. In Roles of Organic Matter in Mineral Diagenesis, SEPM Special Publication No.38, 47-64.

田口一雄・飯島 東・青柳宏一 編 (1978) ダイアジェネシス。地質学論集, 15 号, 243p.

Tissot, B.P., Califet-Debyser, Y., Dero, G. and Oudin, J.L. (1971) Origin and evolution of hydrocarbons in Early Toarcian Shales, Paris Basin, France. AAPG, Bull., 55(12), 2177-2193.

年会費納入のお願い

会員の皆様には日頃よりご支援いただき、誠にありがとうございます。本学会は、1月より新しい会計年度になっております。新年度の年会費の納入をよろしくお願い致します。また、本年度までの年会費を納入いただいていない方は、併せて納入いただけますようお願い致します。

年会費： 正会員 2,000 円
 学生会員 1,000 円

振込み先： 郵便振替口座 00110-7-76406
(名義人：日本有機地球化学会)

最終納入年度の分からない方、銀行口座よりのお送金をご希望の方、所属機関より納入されるなど会員登録名以外でお振込みの方は、事務局財務担当の三田 (mita@fit.ac.jp) までお知らせください。

※学生会員の方へ

これまで学生会員の方で、卒業・修了された時は、事務局までお知らせください。本会の会計年度は1月より始まりますので、この3月末に卒業・修了された方は、学生会員の年会費で結構です。

※異動・転居された方へ

職場や自宅が変わられた方は、会員管理と会誌郵送のために、新しい住所、電話番号等を事務局までご連絡下さい。また、E-mail アドレスをお持ちの方は、ニュースレターのメール配信等のため、差し支えない限り、E-mail アドレスを事務局 (secret08@ogeochem.jp) までお知らせ頂くようお願い致します。

ROG Vol.30(2014 年号;30 周年記念号)への

論文投稿を募集中！！

Researches in Organic Geochemistry

編集委員長 沢田 健

ROG (Researches in Organic Geochemistry)は本学会の学会誌であり、有機地球化学およびそれに関連する論文を掲載し、年1回発行しています。Vol.29は、昨年度1月に発行され、総説1編、論文4編、短報2編、技術論文1編の計8編を掲載しました。Vol.30も通常号になると思いますが、ROGが刊行されて30周年という意味をもつ記念すべき'30号'ですので特別寄稿などを企画しております。30周年記念企画についての具体的な内容は後ほどアナウンスいたします。論文をご投稿予定の方は10月末までにご連絡いただければ幸いです(昨年同様に12月～1月はじめ頃の発行を予定しております)。カテゴ

リーは、1) 論文(article)、2) 短報(short article)、3) 技術論文(technical paper)、4) 総説(review)です。有機地球化学シンポジウムで発表された内容や、博士論文・修士論文成果の発表なども歓迎いたします。詳細は、ROG Vol.29の巻末の投稿規定をご参照ください。また、上記の枠に入らない論文や企画でも、有機地球化学の発展に貢献し、学会員にとって有意義な論文・企画であれば、随時編集委員会で検討を進めます。積極的に編集委員会にお問い合わせ下さい。その他、いろいろなご意見、ご要望、ご感想をお寄せください。

ご投稿・ご連絡は下記までお願いいたします。

PDF 添付ファイルによる電子投稿： 自然史科学部門
sawadak@mail.sci.hokudai.ac.jp 沢田健 編集委員長宛
郵送：〒060-0810 札幌市北区北 10 条西 8 丁目 (TEL: 011-706-2733、FAX: 011-746-0394)
北海道大学大学院理学研究院

編集後記：

本号をもって 5 年間携わらせていただいたニュースレター編集委員を退任することになりました。原稿の執筆、編集にご協力いただいた皆様に心より御礼申し上げます。今後とも NL へのご理解とご協力、そしてご投稿をよろしくお願い致します。(齋)
ニュースレターの編集をするようになり、いかに自分が Microsoft Word を使いこなしていないかがよくわかりました。Word だけでなく Excel、Powerpoint 等でも、もっと精進しなければ(大)

発行責任者 有機地球化学会会長 河村 公隆
〒060-0819 札幌市北区北 19 条西 8 丁目 北海道大学低温科学研究所
Phone: 011-706-5457、 Fax: 011-706-7142
日本有機地球化学会事務局
〒261-0025 千葉県千葉市美浜区浜田 1-2-1
石油資源開発(株) 技術研究所 内
事務局長 早稻田 周
Phone: 043-275-9311、 Fax: 043-275-9316
e-mail: office@ogeochem.jp
郵便口座 00110-7-76406 (名義人 日本有機地球化学会)
編集者 山下 洋平 (北海道大学大学院地球環境科学研究院) 齋藤 裕之 (北海道大学創成研究機構) 大場 康弘 (北海道大学低温科学研究所)
e-mail: news@ogeochem.jp

有機地球化学会ニュースレターはホームページでもご覧になれます。
アドレス：<http://www.ogeochem.jp/>